



京大病院広報

●KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL NEWS●

第6回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を開催



開会挨拶を行う三嶋病院長



福田先生(慶應義塾大学医学部 循環器内科 教授)による特別講演

本文は 4 ページをご覧ください

CONTENTS

- ① 京都子どもの心のケアチームを福島に派遣2
精神科神経科 科長/村井 俊哉
- ② 最先端医療シリーズ3
「インタクトサバイバルを目指した診療
～新生児内分泌学・京都大学の英知を結集した取り組み～」
新生児集中治療部 副部長/河井 昌彦
- ③ 医療安全管理室だより
第6回 医療サービス課医療安全掛4
医療安全管理室 室長/松村 由美
- ④ 院内講演会の紹介4
「第6回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を開催」
- ⑤ 読者より5
「天理よろづ相談所病院 院長就任の挨拶」
公益財団法人 天理よろづ相談所病院 病院長・医学研究所長/上田 裕一
- ⑥ トピックス5
- ⑦ 名物職員紹介8
- ⑧ 新人職員紹介8

次代の医療を担う看護師になる。



〈看護師募集中〉

[URL]<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/~wwwkango/>

京大病院の基本理念

- (1) 患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。
- (2) 新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する。
- (3) 専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する。

発行 京都大学医学部附属病院広報部会
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54
[FAX] 075-751-6151 [URL]<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp>

ご意見、ご感想をお待ちしております。また、原稿の投稿も歓迎いたします。

wwwadmin@kuhp.kyoto-u.ac.jp

1. 京都子どもの心のケアチームを福島に派遣



精神科神経科 科長／^{むらい}村井 ^{としや}俊哉

平成23年3月11日の東日本大震災後、福島県会津地方では、大熊町、楡葉町等、福島第一・第二原子力発電所周辺の住民が避難生活を送っております。同地方における精神医療・精神保健業務の支援、被災者の精神的問題全般への対応を目的として、同年4月11日に「京都府心のケアチーム」が結成され、私ども京大病院精神科神経科のスタッフも京都府の活動に参加させていただきました。福島県からの派遣要請が終わり、同年7月末で支援活動を一旦、終了しましたが、その後も被災地からの心のケアのニーズは高く、同年11月から平成24年3月まで、「京大病院心のケアチーム」（国立大学法人京都大学と一般社団法人国立大学協会との共催事業）として支援活動を続けてまいりました。両チームを通じて、これまで当教室から合計15班、のべ31名（うち精神科医師21名）が支援活動に参加し、避難所や仮設住宅への訪問診療、健康相談会の開催、被災自治体職員への支援などを行っています。

震災から1年以上経った現在でも、福島県の被災者は将来の見通しの立たない不安を抱えながら避難生活を続けておられます。避難生活の長期化にともない、うつ状態や睡眠障害、アルコール依存症、ギャンブル依存等の様々な精神的問題が新たに生じています。被災市町村職員の過重労働はいまだに続き、被災者から怒りの感情をぶつけられることも多く、心理的なストレスを抱えながら勤務に励んでおられます。児童に対する心のケアは長期的な課題で、とくに発達障害などの障害を抱えた児童・保護者への支援が求められています。また原子力災害に起因した様々な差別偏見も見受けられました。これからも長期的な心のケアの支援が必要であり、私たちは平成24年度も文科省の緊急スクールカウンセラー等派遣事業として「京都子どもの心のケアチーム」活動を展開していくことにしました。

「京都子どもの心のケアチーム」では、大熊町、

楡葉町の被災者の方々を対象に、会津若松市といわき市で支援活動を行います。児童・保護者を含む被災者全般の心のケア（個別訪問、相談会の開催など）、精神医学・臨床心理学の専門的な立場からの教職員・スクールカウンセラーへの支援、および発達障害児への支援を行うのが主な活動内容です。精神科医師、臨床心理士などの1～3名で1チームが構成され、当教室に加えて京都大学大学院教育学研究科心理臨床学講座、京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学、京都府精神保健福祉総合センター、京都府立洛南病院が連携してチームを編成し、各チームが現地で3日間の活動を行います。既に平成24年6月より活動を開始しており、平成25年3月にかけて、合計36班（うち当教室より22班）派遣予定です。

私自身は第8班（平成24年7月22日～26日）に参加させていただきました。夏休み中だったこともあり、児童・生徒への直接の支援の機会はありませんでしたが、小中学校の教職員の心理カウンセリング、仮設住宅の訪問、支援員や教職員への講習など、多くの業務がありました。私が訪問した楡葉町立の学校は、いわき市郊外の仮設住宅地に隣接した場所にあり、小中学校が3校身を寄せ合っている未だ仮の校舎でした。震災から1年半、自分自身や家族、そして職場である学校が、転々と移動を余儀なくされる中、教職員の方々が、一人ひとりの児童・生徒の学業や進路、生活のことを何よりも大切に考えておられることには大きな感銘を受けました。しかし、先の見通しの立たない日々が続く中、心身の健康が心配な教職員が何人もおられました。

福島県では今後も避難生活が長期化すると考えられます。震災を機に生活環境・家族関係・経済的基盤が一変し、これからも様々な歪みをもたらすことが予想され、長期的な心のケアの支援が必要です。少しでも被災者のお役に立てるように、教室員一同、力を合わせて支援活動を続けてまいりたいと考えています。

2.最先端医療シリーズ

インタクトサバイバルを目指した診療～新生児内分泌学・京都大学の英知を結集した取り組み～ 新生児集中治療部 副部長／河井 昌彦



京大病院における周産期医療は、産科分娩部・小児外科・心臓血管外科・泌尿器科・眼科・形成外科など多くの診療科の協力を得て、ここ数年、診療規模を拡大し充実の一途をたどっています。表1に示したように、

2008年以降、NICUの入院児は、極低出生体重児（出生体重が1500g未満の児）・外科疾患・心臓疾患といった重症例が著しく増えており、京都における最終拠点病院としての役割を果たしています。このような、重症のお子さんたちを診療する中で、京大病院NICUの診療成績は日本のトップに位置しており、過去4年間の極低出生体重児の治療成績は約95%を維持しています。

京大病院NICU入院児の救命率は年々向上し、頭蓋内出血・脳室周囲白質軟化症など重篤な神経学的後遺症に直結すると言われる合併症の頻度は減少してきました。これは、呼吸・循環管理が高度に進歩してきたことを示しています。しかし、生存退院したお子さんの発達障害の頻度は、一般のお子さんに比して高いという、周産期医療の抱える命題は、我々も完全には克服できていません。そこで、近年我々はインタクトサバイバルに向けた様々な取り組みを行っています。

従来、甲状腺・副腎皮質ホルモンといったホルモンが中枢神経系の成熟に重要な役割を果たしていると言われてきましたが、早産児の内分泌環境の知見はこれまで非常に限られていました。そこで、我々は「胎児・早産児の適切な内分泌管理がその予後を改善するのでは？」と

考え、日本のNICUで初めて「新生児内分泌学」に取り組み、世界に新たな情報を発信しています^{1) 2)}。具体的には、我々はNICUにおいて甲状腺刺激ホルモン放出ホルモン（TRH）負荷試験・副腎皮質ホルモン刺激ホルモン放出ホルモン（CRH）負荷試験を積極的に行うこと、血液のみならず唾液中のホルモン（コルチゾール・メラトニンなど）を測定することによって得られる情報を、日々の診療に活かし、常に適切なホルモン補充療法を心がけています。

また、発達障害に対する早期療育の開始は非常に重要であると考えられますが、軽度発達障害の早期診断は難しく、この事実が早期介入の大きな障壁となっています。そこで、我々はMRI診断においても最新の診断法を取り入れること（放射線診断科との共同研究）、NIRS（光トポグラフィーによる脳内酸素の測定）・唾液ホルモンの測定による内分泌環境の日内変動リズムの獲得過程などをNICUのみならず、発達外来において取り入れること（京都大学教育学部などとの共同研究³⁾）によって、早期の発達のより早期の評価を目指し、これらの結果を一人一人のお子さんの診療に活かしています。

このように、我々NICUは他の診療科のみならず、京都大学の他の学部の先生方の英知を集結し、一人一人のお子さんの最大の幸福に寄与できるよう取り組んでいるのです。

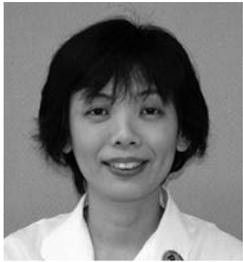
- 1) Matsukura T et al. J Clin Endocrinol Metab 2012
- 2) Niwa F et al. Clin Endocrinol 2012
- 3) Shibata M et al. Neuroreport 2011

表1 京都大学医学部附属病院NICUにおける2008年度以降の入院統計の推移

	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
年間入院数	123	95	151	151
院内出生	110	71	123	122
院外出生	13	24	28	29
極低出生体重児	18	21	31	40
500g未満	1	0	2	3
500～1000g	6	11	18	18
1000～1500g	11	10	11	19
外科疾患	13	12	18	12
心疾患	15	12	19	30

3. 医療安全管理室だより 第6回 医療サービス課医療安全掛

◆医療安全管理室 室長／^{まつむら ゆみ}松村 由美



今回は医療サービス課医療安全掛を紹介します。患者さんと医療者の間を取り持つ部署で、事務職員が担当しています。2012年4月から患者相談窓口担当に看護師も加わりました。患者相談窓口、診療録の開示、医療安全活動に対する事務作業などを行っています。

患者さんから受ける相談の中には、「主治医から十分な説明がなく、今後の治療に不安がある」「手術による合併（併発）症が生じたが、事前に説明がなかった」というものがあります。患者さんがどの程度までご理解されているのか、まず話を聴くところから始まります。相談員は事務職であるからこそ、患者さんに近い視点で理解することができます。医療者からの再度の説明が必要と思われる場合には、その機会を設定いたします。それぞれの患者さんの理解度に応じて説明の仕方を工夫する必要がありますので、事務職員が医療者からあらかじめ説明を聞き、まず内容を理解します。患者さんからの相談内容を基に説明の仕方を医療者と一緒に考えます。要望があれば、説明の場に事務職員が同席することもあります。

相談窓口では、医療者の態度に対する苦情、待ち時間

や治療費など病院のシステムに対する苦情を受けることもあります。その場合には、状況を詳しくお聞きして、必要な場合には調査を行ってから患者さんに報告します。思い違いや誤解がもとになっている場合には、事実を調査することで解決できることもあります。また、相談内容について関係部署と話し合った結果、病院の質の改善につながることも少なくありません。

病院の職員であり第三者という訳にはいきませんが、患者さんと医療者の一方に偏ることがないように中立性を心がけた活動を行っています。2011年度の相談件数は688件でした（医療者からの相談も含む）。



医療サービス課医療安全掛

4. 院内講演会の紹介

第6回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を開催



講演者の方々へ様々な質問が投げかけられました。

7月20日（金）に、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館にて開催しました。同研究会は、当院におけるiPS細胞、ES細胞及び体性幹細胞等を用

いた再生医学研究の向上並びに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足したものです。第6回目となる今回の研究会では、学内外から100名近い参加がありました。

研究会では、三嶋 理晃 病院長の開会挨拶の後、中島 秀典 先生（アステラス製薬株式会社 分子医学研究所バイオ創薬第二研究室）より「再生医療への organogenesis の応用」に

ついて、門田 真先生（京都大学物質・細胞統合システム拠点）より「ヒト ES/iPS 細胞由来心筋細胞を用いたリエントリー性不整脈モデル」について、櫻井 英俊 先生（京都大学 iPS 細胞研究所 特定拠点講師）より「iPS 細胞技術を活用した筋ジストロフィーの治療研究」について、山下 潤 先生（京都大学 iPS 細胞研究所 教授）より「ES/iPS 細胞を用いた多面的心血管再生治療戦略」について一般講演が行われました。

引き続き、福田 恵一 先生（慶應義塾大学医学部 循環器内科 教授）より「iPS 細胞を用いた心臓病の病態解明と心臓再生医学への展開」について特別講演が行われました。



真剣に聴講する出席者の方々。

5. 読者より

天理よろづ相談所病院 院長就任の挨拶 公益財団法人天理よろづ相談所病院 病院長・医学研究所長／上田 裕一



2012年1月より公益財団法人天理よろづ相談所病院の病院長・医学研究所長に就任しました上田 裕一でございます。当院は昭和41年(1966年)より、京都大学医学部の関連病院の一施設として、京都大学のご支援によりまして、多くの診療部長はじめ中堅スタッフに活躍していただいていることは皆様ご存知のとおりです。そのおかげで、診療、臨床研究そして卒後教育においては、高い評価をいただいております。ちなみに私は当院のレジデント制度の1期生ですが、このレジデント制度はこれまで36年の歴史を重ねてまいりました。この間には多くのレジデント修了者が、京都大学大学院や診療科での専門領域の研究・診療に進路を求め、指導を受けて参りました。本年に入ってから数カ月だけでも、レジデント修了者2名が当院に戻り、副部長に着任してくれました。伝統のレジデント制度の継承に加えて、時代の要請

に応える診療体制を築いて参りたいと考えております。さて、当院は目下、大きな変革期にありますので、概略を紹介させていただきます。2011年5月末に内閣総理大臣より「公益財団法人 天理よろづ相談所」として認定を受けました。また、10月には文部科学大臣より天理医療大学の設立認可を受け、吉田 修京都大学名誉教授を学長に迎え、本年4月に開学いたしました。さらに、急性期医療の中核となる500床の新入院診療棟を2014年1月の診療開始にむけて、外来診療棟に隣接して建築中があります。本館および白川分院と合わせて1001床の規模には変わりはありませんが、さらに地域医療、救急医療にも貢献できる充実した設備が整うものと期待しております。このようにハードウェアは調達できますが、最も重要であるのは、診療に当たる多職種を含めた人材であることは言うまでもありません。冒頭にも記載しましたように、レジデント制度だけではなく高度な医療の推進において、今後とも京都大学医学部との緊密な連携と、ご指導・ご支援を賜りますようお願い致します。

に応える診療体制を築いて参りたいと考えております。

さて、当院は目下、大きな変革期にありますので、概略を紹介させていただきます。2011年5月末に内閣総理大臣より「公益財団法人 天理よろづ相談所」として認定を受けました。また、10月には文部科学大臣より天理医療大学の設立認可を受け、吉田 修京都大学名誉教授を学長に迎え、本年4月に開学いたしました。さらに、急性期医療の中核となる500床の新入院診療棟を2014年1月の診療開始にむけて、外来診療棟に隣接して建築中があります。本館および白川分院と合わせて1001床の規模には変わりはありませんが、さらに地域医療、救急医療にも貢献できる充実した設備が整うものと期待しております。このようにハードウェアは調達できますが、最も重要であるのは、診療に当たる多職種を含めた人材であることは言うまでもありません。冒頭にも記載しましたように、レジデント制度だけではなく高度な医療の推進において、今後とも京都大学医学部との緊密な連携と、ご指導・ご支援を賜りますようお願い致します。

6. トピックス

「七夕まつりコンサート」を開催

7月5日、医学部附属病院では「七夕まつりコンサート」が開催されました。このイベントは外来診療棟3階図書コーナー「ほっこり」で毎年開催されているものです。



ピアノ:西脇 小百合さん、ヴァイオリン:石上 未来子さん(左)、石上 真由子さん(右)

今年はヴァイオリン・石上真由子さん、石上未来子さん、ピアノ伴奏の西脇小百合さんが出演し、クラシック音楽を演奏して頂きました。「ルクレール」、「ラ

フマニノフ」、「サンサーンス」、「フォーレ」、「バッハ」が演奏され、来場された多くの患者さんは聞き慣れた楽曲、初めて聞いた楽曲、それぞれ思い思いに楽しまれました。



楽曲を楽しむ患者さんたち

会場にはたくさんの患者さんの願いごとが書かれた短冊や、窓や壁に色とりどりの七夕飾りに飾られ、華やかな会場となっていました。

医療安全に関する講習会・臨床倫理に関する講習会「患者対応について～本院事例から学ぶ2012～」の開催

7月13日、医療安全に関する講習会「患者対応について～本院事例から学ぶ2012～」が開催されました。講演者は、医療サービス課のスタッフの方々です。

講習会では、まず患者さんからの相談内容や様々なトラブルを取り上げるに当たり、医療サービス課のスタッフの方々による寸劇を交えながら行われ、非常に分かりやすい内容でした。こういった状況に遭遇した際の対処法について「現場

で対応」、「患者さんの話をよく聞く」、「患者さんにわかりやすく説明する」を行い、患者さんの小さな声に耳を傾けることが重要であることを説明されました。



寸劇を演じられた医療サービス課のスタッフの方々

「京大病院オープンホスピタル 2012」を開催

7月21日、外来診療棟のアトリウムホール・エントランスホール他において、「オープンホスピタル2012」が開催されました。

この行事は、社会から選ばれる病院となるため、将来の医療を担う高校生や看護学生をはじめ地域住民の皆さまに、安全で安心を得られる質の高い医療を提供するため院内の各部門が実施している活動内容を紹介し、京大病院の魅力を知っていただくよう企画しているもので、通算で5回目を迎えます。(前身である「看護フェア」を含めると、7回目を迎えます。)

吹き抜けのアトリウムホールでは、部門ごとの活動内容を説明した「パネル展示」が設置され、参加者は看護師らの説明を熱心に聴いていました。



「パネル展示」の様子

また「体験コーナー」では、「肺年齢」や「インボディー測定」などといった自身の普段気になっている箇所を調べることができたり、資生堂のスタッフの方々の協力で「ハンドマッサージ」



「ハンドマッサージ」の様子

」をしてもらったり、と、体験された方々は大変喜ばれていました。

エントランスホールのウェルネスエリアでは、京都大学の職員や学生で構成された合唱団「かるがも♪あんさんぶる」のコーラスや、京都市立芸術大学卒業生によるフルート四重奏が行われました。



ミニコンサートの様子

「かもがわ♪あんさんぶる」によるコーラス

生で構成された合唱団「かるがも♪あんさんぶる」のコーラスや、京都市立芸術大学卒業生によるフルート四重奏が行われました。

その他、看護及び放射線関係の学生を対象とした就職案内や、看護師宿舎及び院内各部署の見学ツアーが行われました。

午後2時30分からは臨床第一講堂で、桂 米朝一門の桂 塩鯛 (かつら しおだい)、桂 小鯛 (かつら こだい) 氏による「京大病院寄席」が行われました。

臨床第二講堂やアトリウム内でも落語の模様を放映し、より多くの方々に観てもらうことができ、病院全体が笑いに包まれた楽しい空間となりました。



「京大病院寄席」で落語を披露する桂 塩鯛氏

当日は、約750名の来場者が京大病院を訪れました。

医療機器の安全使用に関する講習会「血液浄化について－指示の観点から－」の開催



講演される塚本先生

7月24日、医療機器の安全使用に関する講習会「血液浄化について－指示の観点から－」が開催されました。講演者は、腎臓内科 准教授 塚本達雄 先生です。

講習会では、まず急性腎不全、腎障害の症状について図を使いながら詳細に説明されました。そして本題である「血液浄化」について、主に急性血液浄化法と医療器材の使い方、薬剤を使用するに当たってのリスク要因と事例を取り上げ、説明されました。

院内感染対策に関する講習会「針刺し・血液曝露の予防策・対処法について」の開催

7月27日、院内感染対策に関する講習会「針刺し・血液曝露の予防策・対処方法について」が開催されました。講演者は、感染制御部 教授 松村康史 先生、看護部 山中 寛恵 副看護部長です。

講習会では、まず松村先生より、血液媒介病原体及びその感染防止の基本について、HBワクチンと針刺しを例に挙げて説明されました。そして感染予防策、曝露・感染後のフォローについて説明されました。次に山中副看護部長より、針刺しに伴う血液・体液曝露・感染のデータをもとにリスクの高さについて説明され、そのリスクを避けるための予防策について詳細に説明されました。



講演される松村先生と山中副看護部長

医療安全に関する講演会

「患者さんが納得する医療とは：医療紛争は予防できるか？」の開催



講演される松村先生

講習会では実例を踏まえ、医師や看護師が患者さん

8月2日、医療安全に関する講習会「患者さんが納得する医療とは：医療紛争は予防できるか？」が開催されました。講演者は、医療安全管理室 室長 松村 由美 先生です。

に症状をきちんと説明し、納得してもらうためにはどのように対応すべきか、また誤認しやすい用語をどのように使用すべきか、といった対処法・トラブル予防法について説明されました。今回は受講者参加型の講習会で、現場で働く医師や看護師がリスクについてどのように考えているか、を共有し合いながら受講できました。

安全衛生管理指針に関する講習会「労働安全衛生法上の安全衛生教育の実施について」の開催



講演される浅田さん

8月24日、京都大学安全衛生管理指針（標準）に関する講習会「労働安全衛生法上の安全衛生教育の実施について」が開催されました。講演者は、安全衛生管理室 浅田 博史さんです。

講習会では、私たちが業務を安全かつ円滑に進めることができるよう、京都大学の安全衛生管理指針を使って「働くにあたっての基礎知識」について説明されました。具体的な内容として、天災、人災等に伴う緊急時の対応、業務時における体調やメンタル管理、労働災害といった内容を取り上げ、身近な問題として意識付けられました。

院内感染対策に関する講習会「標準予防策・手指衛生について」の開催

8月27日、院内感染対策に関する講習会「標準予防策・手指衛生について」が開催されました。講演者は、感染制御部 准教授 高倉 俊二 先生、看護部 山中 寛恵 副看護部長です。

講習会では、まず高倉先生より、病原細菌感染に関する標準予防策について、特に手指衛生の重要性について詳細な説明されました。手指衛生の必要性を自覚するとともに、プロの手洗いを身につけることを促されました。プロの手洗いとして、①手のひら、②手の甲、③指の先、④指の間、⑤親指のつけね、⑥手首の順で丁寧に行うこと、そして患者さんを診療する前に必ず手を洗うこと、

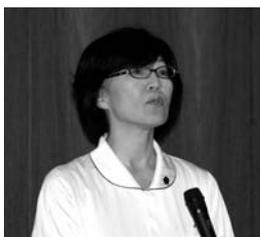


講演される高倉先生と山中副看護部長

を喚起されました。次に看護師 山中さんより、病原細菌が手を通じて伝播する5つの段階と、手指衛生の5つのタイミングについてそれぞれ詳細な説明されました。

医療安全に関する講習会

「ノンテクニカルスキル～コミュニケーション技術の向上をめざして～」の開催



講演される山中副看護部長

講習会では、医療者のパフォーマンスを向上させるた

9月6日、医療安全に関する講習会「ノンテクニカルスキル：コミュニケーション技術の向上をめざして」が開催されました。講演者は、看護部 山中 寛恵 副看護部長です。

めには、専門的技術を補完する技術＝ノンテクニカルスキルが重要であることを説明されました。このスキルの要素には、状況認識・意思決定・コミュニケーション・チームワーク・リーダーシップ・ストレスマネジメント・疲労対処があり、これらを学び、実践していく必要があります。また何かトラブルが起こった際に、その構造をきちんと把握したり、振り返ったりすることで、トラブルを軽減することができることを説明されました。

医療安全に関する講習会「セルフケア講習会～基礎演習～」の開催



講演されるアドバンテッジリスクマネジメントの高橋さん

9月4・7日、医療安全に関する講習会「セルフケア講習会～基礎演習～」が開催されました。講演者は、アドバンテッジリスクマネジメント チーフコンサルタント 高橋 良信さんです。講習会では、ストレスにつ

いて正しく理解し、ストレスに対処する方法を身につけるために、ストレスに関する基礎知識、対処行動、認知行動スキルについて、詳細に説明されました。業務に携わるに当たって、ストレスを軽減しようとする、どうしても回避するためにはどうしたらいいか、と考えがちですが、高橋さんは回避ではなく、どのようにストレスと付き合っていくかが肝心であり、その対処法（リラクゼーション法など）を説明されました。

7. 名物職員紹介

◆病理診断科 准教授／南口 早智子



南口先生は平成23年4月1日付けで京都医療センターより異動となり、スタッフに加わりました。従って新入職員ではありますが、当科（前病理部）に研修医、大学院生、助教として在籍（平成6年～12年）した後の帰還で、既に他診療科の多くの先生方に知られる名物職員です。熟練病理医として日常の診断業務とカンファランスを精力的にこなす南口先生の持ち味は、よく

通る大きな声と京都西陣育ちという環境で培われた卓越したコミュニケーション能力です。専門は婦人科病理学で、特に胎盤、周産期病理学の領域では全国的にも広く知られるエキスパートですが、肝胆脾・消化管、腎臓の病理学を含む幅広い分野に精通しています。趣味は観劇と温泉めぐりで、仕事と余暇をともに楽しめる一方で、ご家庭では家事を切り盛りして内科医のご主人を支え、お二人の息子さんを育てられています。『良きお母さん』として周囲の同僚にも細やかな気配りをいただいています。紹介者：病理診断科 准教授／三上芳喜

8. 新人職員紹介

◆医療情報企画部 助教／岡本 和也



岡本和也先生は本年7月より医療情報企画部の助教として採用されました。岡本先生は本学大学院情報学研究科の出身で、学生のころから医療情報部（現・医療情報企画部）に出入りし、研究を続けてきました。プログラミング好きな彼は、ちょっとしたプログラムであれば簡単に作って涼しい顔をしています。また、プログラミングは物づくりという意味で料理にも通じるのか

料理好きの一面もあり、学生のころには、研究室で鍋パーティを度々開催し、みんなの親睦を深めるのに一役かってくれていました。

岡本先生は若手研究者として優れた研究成果を残しており、いくつもの賞を受賞しています。業務においても、これまでの病院情報システムの導入において、病院中を動きまわり、作業をこなしてくれています。そんな彼に医療情報企画部の即戦力として期待をよせています。今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。

紹介者：医療情報企画部 教授／吉原 博幸



ご寄附のお願い

京都大学医学部附属病院では、高度医療の充実発展、新医療の創生及び医学教育・研究を推進するため、寄附金を受け入れております。詳細は、京大病院ホームページ【URL】<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp> をご覧いただくか、事務部経理・調達課産学経理掛（TEL.075-751-3059）まで。